

説教余滴 2019年8月25日「こまっちゃったなー」

田浦教会落語会の準備が進められています。

ある時、高名な立川談志師匠が激昂したそうです。ご自分が話している最中に居眠りをしている客がいた。けしからん叩き出してしまえ、と言うわけです。これを聞いた評論家などは、『さすが談志師匠、プライドが高い。その見識も立派』と賞賛。私は、怒ることは理解しますが、よくない事と考えます。金を払って聴きに來たのに居眠りしたお客さんのほうが怒るのが当然と考えます。聞きたいから來たのに、木戸銭まで払ったのに、寝かされちゃったよ。銭返せー。

しかし、昔の噺家ならば、「俺の噺、よく受けてしまったよ。気持ちよく眠っちゃうほどに」と言ったかもしれません。自分の芸の未熟さを教えられた、と感謝するのが筋だ、と考えます。

笑いを商売とする人は、自分自身を笑いの種として提供してきました。今のお笑い芸人は、自分を高みにおいて、他を低くしていじり、笑いものにするようです。ヨシモト系の考え方でしょうか。

NHKに《バス通り裏》というドラマがありました。牟田悌三さんがユーモラスな役で評判でした。「こまっちゃったなー」というセリフが売りでした。誰でもない、自分自身が困っている状態、それを笑いの種に提供していました。上質な笑いでした。

牟田さんは、東北大学出身、YMCAに所属。俳優になってからも、YM同盟と関係が続き、御殿場東山荘で「年末年始の会」があると、総合司会を務めていました。

結核のため活動できなかった時、笑いについて考えたそうです。あのセリフは、一所懸命働き、困っている自分を、外に居るもう一人の自分が外から眺めて言う言葉と理解しているそうです。困っているのに、どこかゆとりが感じられるのは、困っている自分を客観的に見ているからでしょうか。